

東京 IPO 特別コラム

2019年3月1日 Vol.142

2月IPO銘柄は堅調スタートだが

全体相場が戻り歩調で推移する中で2月22日からスタートした2019年IPO銘柄の取引は概ね堅調なものとなった。2019年第1号銘柄となった識学(7049)は放出株数が少なく需給の良さもあり公開日には初値がつかず25日に値が付いた。公開価格1800円に対して初値は2.5倍の4550円。その後の高値は5740円(初値比+26.2%)まであり堅調な推移が見られた。これに続く26日のリックソフト(4429)は公開価格4000円に対して初値は取引開始から2日目に2.3倍の9050円で寄り付き、その後の高値は11470円(同+26.7%)まで上昇。識学と同じような値動きとなった。

2月のIPO銘柄は5銘柄。これらに続く27日の東海ソフト(4430・東証2部)も公開価格1500円に対して27日の後場直後、1.91倍の2872円で初値がついた。高値は初値を3.4%上回る2969円でその後は時間を追って値を下げる展開が見られた。上昇力の弱さは28日のフロンティアインターナショナル(7050)にも引き継がれ、放出株数が比較的多かったことと総合プロモーション事業という業種の不人気もあり、マザーズ銘柄ではあるが公開価格2410円に対して初値は12.7%上昇の2715円と穏健なスタートが見られた。初値をつけた直後に安値2628円をつけたがその後は高値3090円(同+13.8%)まであがった。短期資金がメインでその後は初値水準以下まで売られる展開が見られた。これに対して28日にIPOしたもう一つの銘柄、スマレジ(4431)は公開価格1370円に対して2.35倍の3225円で初値が形成され、その後3925円(同+21.7%)の高値まで上昇し高値引けとなった。それぞれに成長性への評価、需給の良さなど投資家の思惑が働いての株価形成で、銘柄ごとに違いはあるものの概ね堅調だったと言える。昨年末のソフトバンク株上場後の需給悪をほぼ解消し、これから17銘柄がIPOしてくる3月に向けた地ならしができたと言える。

こうした順調な展開が果たして今後も維持できるかは全体相場の動きにも左右されがちで、国内外の市場環境によって変化が予想され、やや心許ない。うがった見方をすれば1月から2月中旬までお休みしてきたIPOを消化するには戻り歩調が見られる市場環境は最適だったとも思える。全体相場がジリジリと上値を追う中で投資対象が絞り切れずにきた個人投資家のリスクマネーのはけ口が一部の創業ベンチャーや中小型銘柄に絞られる中で好需給のIPO銘柄に関心が高まってきたものと前向きに考えたい。問題はこうした市場環境がいつまで続くのか、戻り相場を辿ってきた全体相場の反落場面はいつやってくるのかといった点にある。今回の米朝協議が合意に至らず、やや先行きの半島情勢に不透明が生じたことに加え、米中貿易戦争の行方など国内外のマクロ経済に影響する不透明要因は今後のIPO相場にも多少の波乱をもたらす可能性も否定できない。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)